

韓国における日本的近代風景の観光消費

—「反日」とノスタルジア—

趙相宇

一 はじめに

ソウル・チョンロにおけるピマツコルを連想させる懐かしい商店街で、名のとおり思い出の通りだ。

この一文は、韓国における人気旅行ガイドブック『도쿄 一〇〇배 즐기기』(《도쿄에 이치 코리아 二〇一五年》)に掲載されたもので、東京都新宿区に位置する思い出横丁を紹介している^①。日本ではなく、韓国のガイドブックがこのような場所で懐かしさを発見することはいささか妙であるが、こうしたまなざしは東京の他の場所でも見られる。隣接する新宿ゴールデン街^②、東京下町の面影を色濃く残している東京都台東区谷中周辺の

どがそうである。特に『TRAVIE』(《트러블 여행신문 二〇一四年》)という韓国国内の旅行新聞における谷中周辺に関する記述はより露骨にノスタルジアを表している^③。

古い看板を掲げ、昔ながらの家具をそのまま使っている米屋やお惣菜屋、クリーニング店を通っていくと、日本人でもないのに妙な郷愁に浸る。

いつから、なぜ、日本人でもない韓国人が世界的な大都会である東京において、ひいては日本においてノスタルジアに浸るようになったのか。これが本論考の問いである。

二 ノスタルジアと本論考の目的

ノスタルジアとは何か。この言葉を辞書横断検索システムである「コトバンク」でひくと、「異郷にいて、故郷を懐かしむ気持ち。また、過ぎ去った時代を懐かしむ気持ち。郷愁。ノスタルジー」と紹介されている⁶⁰。一般的にノスタルジアは感情の問題として認識されている様子がうかがえる。また、『現代社会学事典』（弘文堂、二〇一二年）にノスタルジアの単独項目は無く、九五頁「うつ」の項目に間接的に含まれている⁶¹ことから、この問題への方法論的主流派が、少なくとも社会学ではないことが垣間見える。

こうした感情に関する問題を心理学以外の社会科学はどのようにアプローチできるのか。本論考では、F・デーヴィス著『ノスタルジアの社会学』（世界思想社、一九九五年、間場寿一ほか訳）と日高勝之著『昭和ノスタルジアとは何か』（世界思想社、二〇一四年）を参考にした。

前者の場合、ノスタルジアを私的な感情の問題から、

深く社会に根ざした情動の問題に捉え直し、心理学以外でのノスタルジアの定義を試みる。

デーヴィスは、ノスタルジアを呼び起こす一般的な条件や状況への理解を深めることが大事だとし、単なる回顧とノスタルジアを区分する。その際、基準にしているのが、「過去の肯定」と過去との対比における「現在の否定」という過去との特別な関係性である。こうした条件を踏まえて、「現在もしくは、差し迫った状況に何らかの不定的な感情を背景にして、生きられた過去を肯定的な響きでもって呼び起こすこと」と定義付けている⁶²。

では、デーヴィスの言うノスタルジアを呼び起こす条件と状況とは具体的にどういうものを指すのだろうか。彼自身、社会的条件や状況についての理解が必要だと主張しながらも、どういう社会的条件や状況なのか具体的な記述はない。あくまでもこれからのノスタルジア研究への試金石、となっている。韓国人による日本へのノスタルジアを理解するためには、より具体的な方法論が必要であり、その一端を日高の研究から探すことができる。

日高勝之は『昭和ノスタルジアとは何か』のなかで、

ノラやギデンズの議論を重視しながら今の時代を歴史と記憶の境界なき時代であるとし、ナラティブ研究の重要性を訴えている。また、イギリスの社会学者ローランド・ロバートソンの主張に同調し、「現代の記憶は、メディアやポピュラーカルチャーなどの大衆消費主義と深く関わっており、ノスタルジアは、大衆消費財の中に埋め込まれたイメージとして（のみ）人々に提供されるようになってきている」（五五頁）と述べる。歴史なき時代だからこそ人々は過去へと想いを寄せ、それによってメディアやポピュラーカルチャーのなかで記憶が生まれるのである、重要となっていくという指摘である⁹⁰。彼の議論はグローバル化と活発な文化交流が進む現代においてノスタルジアを考えるうえでかなり有効なものであろう。

例えば、日本人（主に女性）が『ピーターラビット』や『赤毛のアン』の舞台を訪れては、「故郷」として懐かしみ、泣き崩れるような現象がある。MH・リアによれば、日本の九〇年代は阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件など、懐かしく振り返るには複雑であり、子どもの頃から見てきた一種のワンダーランドの方が彼らにとって

リアリティある「ふるさと」になったと論じている⁹¹。

こうした議論は、韓国の事例を考える際にも応用可能である。韓国人のノスタルジアに関する問題を考える際、日本との文化交流の歴史は避けては通れない。韓国人の多くが日本の大衆文化、主にアニメや漫画に親しんでおり、ときには剽窃の問題と絡んで自国の文化だとさえ思っていた経緯があるからである⁹²。韓国人にとつての近過去とは「昭和」だったとも言えるかもしれない。何らかの韓国国内の社会的不安を背景に、そうした文化交流の地盤が日本へのノスタルジアとして現れても不思議ではないだろう。ただ、韓国の事例は単純にグローバル化に伴う文化交流の旺盛とソフトパワー論だけでは語れない側面がある。日本と韓国の間には植民地支配に起因する歴史問題が未だに残されており、両国のあらゆる交流において大きな障壁となっているからである。文化交流も例外ではない。

本論考では、こうしたいわゆる「反日」の問題を念頭におきながら論を進めたい。否定的な情緒「反日」を抱いているはずの韓国人が肯定的な情緒「ノスタルジア」

を日本に向けるのはなぜなのか。一見矛盾しているように見える現象の一端を紐解き、ポストコロニアル的ノスタルジアを論じることを目的とする。その際、F・デーヴィスが指摘したノスタルジアの社会的条件を念頭に、具体的な方法論としては、日高の大衆文化をめぐるナラティブ分析や、観光社会字の視座などを適宜応用し、ポストコロニアル空間においてノスタルジアが起る社会的条件や状況に対する理解を深めていきたい。

三 歴史的文脈から切り離された文化消費

(一) 植民地支配の記憶と日本文化消費

韓国における近過去は、植民地支配の影響もあつて「基本的要素」が所々色濃く残っていた。大衆文化も例外ではない。例えば、植民地解放後の韓国では、日本式歌謡(主に演歌)が大衆文化の主要な一角を占めていた⁹⁰⁾。

また、植民地支配と直接的な関係はないが、日本でも有名な手塚治虫の『鉄腕アトム』は『宇宙少年アトム』として韓国でもお馴染みのキャラクターである。つまり、

韓国人が身近な過去を振り返る際、常に日本的要素が介在してくるのであり、当然だが、日本的要素に溢れている日本においてそうした過去の思い出を重ね合わせることは何ら不思議ではないようにも思える。だがその一方で、一九九〇年代前後まで旧支配者への敵対感情は日本文化消費にも如実に現れていた。例えば、一九八六年一〇月二五日付『東亜日報』には次のような日本文化批判記事が掲載された。⁹¹⁾

最近青少年たちの間で日本のファッション雑誌、大衆歌謡およびヘアスタイルが度を越して流行しており、これに関する指導が要望される。「中略…引用者」キム・シンイル教授(ソウル大・教育学)は「青少年の間で流行している日本の大衆文化および服または学用品などの倭色風潮は育ち盛りの青少年たちの思考のあり方にまで影響を与えるだけでなく、主体性の欠如を招く恐れがある」としながら「伝統文化に対する学校および社会教育の不在がこのような現象を呼んだ」と分析した。

つまり、「倭色」として批判されるべき日本文化を、批判能力のない若者が消費することは問題とされ、「指導が要望」されるほど、韓国人のアイデンティティへの脅威として捉えられているのである。キム・ソンミンによれば、このような言説は大きく「民族アイデンティティ論」、

「反日国民感情論」、「子ども・青少年保護論」、「国内文化産業保護論」に分けられるという。¹²⁾ 例示した記事は、それぞれ四つのタイプに少しずつ触れているとも見え、はつきりと分けられるものではない。いずれにしろ、このような日本の大衆文化への批判的なまなざしから、植民地支配の歴史による「日本的なもの」への嫌悪と警戒を読み取ることは、そう難しいことではない。すなわち、植民地支配という「負の過去」と日本文化消費は、当時はまだ分かちがたく、F・デーヴィスが示したノスタルジアの条件の一つである「過去への肯定」とは程遠い状況だった様子がうかがえる。ノスタルジアが過去との特別な関係性において成立するものであるのならば、まず、歴史的理由から「日本的要素」に溢れていた自らの過去を肯定的に振り返ることが可能にならなくてはならない。

植民地支配の歴史に起因する感情と日本を文化的に消費することは別で、むしろその消費を肯定的に見つめられる社会風土がどこかの時点で成立しなければ、韓国人による日本へのノスタルジア観光またはまなざしを説明することは難しいだろう。

(二) 文化消費の歴史的な文脈からの離脱

いつから韓国社会において植民地支配という歴史的な文脈と日本の大衆文化の消費は切り離されたのだろうか。本論考では、この問いについて『朝鮮日報』アーカイブ上で得られる日本アニメ『クレヨンしんちゃん』に関する言説から分析したい。

『クレヨンしんちゃん』は韓国でも大きな人気を博している一方、幼稚園児が先生に対して性的なまなざしを見せたり、淫らな振る舞いを見せたりするなど、度々「低俗な日本文化」「倭色」という認識に触発されて物議を醸してきた。一九九八年に部分的に「日本大衆文化開放」が行われるまで、「日本大衆文化禁止」という法律上根拠の乏しい制度が日本文化批判「言説」によって機能して

きた⁽¹³⁾ 韓国において、その批判の格好的である『クレヨンしんちゃん』言説を追うことは一定程度有効であると思われる。

『クレヨンしんちゃん』は、韓国では『チャングは止められない』という韓国語のタイトルとして知られている。この作品が日本のものであることが発覚するのは、『朝鮮日報』上では一九九七年⁽¹⁴⁾で、批判的記事が集中するようになるのもこの時期に当たるとする。その記事の主な内容は「低俗」「倭色」な日本文化から青少年を守るために行われた、一般市民による自前の文化創造努力であった。少し長いが一九九八年七月一八日付の『朝鮮日報』を引用したい⁽¹⁵⁾。

日本の不良漫画から子どもたちを守ろうとした一人の母親が直接漫画本を作った。漫画『お母さん！○○ウオンちようだい！』（YIT出版社）を綴ったアマチュア漫画家ベク・ヒスク氏。ソウルチャンピオン中学校の国史教師であるベク氏は初等学校五年生（イ・ソユン）と七歳となった（イ・チェユン）娘

二人の母親だ。

彼女は「日本漫画『チャングは止められない』は子どもがお母さんや女性の先生までを性的好奇心の対象にする乱雑な内容にもかかわらず、最近子どもたちの間で爆発的な人気を誇っている」とし、「このような低質漫画の代わりに我が子が読んでもいいような漫画を描き始め、それが高じて生まれて初めての本まで出した」と語った。

一方、このような『クレヨンしんちゃん』に対する批判は、長くは続かなかった。早くも一九九九年には『朝鮮日報』アーカイブ上ではほぼ見られなくなったのである。その代わり、ある意味肯定的に捉える言説が目につくようになる。例えば、一九九九年八月二日付『朝鮮日報』では次のように報道されている⁽¹⁶⁾。

とてもはまって読んでいた漫画をテレビ上で会える喜びは格別だ。最近パブリックテレビとケーブルテレビで話題になっているアニメーションは出版漫

画としてもものすごい人気を博した作品。〔中略：引用者〕『ポケットモンスター』（SBS水・木午後六時一五分）とソウル文化社の『チャングは止められない』（SBS月・火午後六時一五分）も話題だ。

この記事では『クレヨンしんちゃん』批判は見られず、むしろ、ある種の懐かしさを帯びた文脈のなかで語られている。この記事以外にも、二〇〇〇年三月二七日付の記事⁽¹⁷⁾や二〇〇七年三月二日付記事⁽¹⁸⁾も興味深い。前者では、今まで批判されてきたはずの『クレヨンしんちゃん』における「低俗さ」は愛着の対象になっている。後者では、ケーブルテレビ各社が三・一抗日記念日を『クレヨンしんちゃん』や『ドラえもん』デーにしている様子が報道されている。

こうした分析結果はあくまでも『朝鮮日報』だけに絞ったものであるため、全体的な傾向を代弁するものではない。ただ、『朝鮮日報』が韓国の代表的メディアの一角であることは間違いなく、少なくとも、一九九九年を前後として、日本の大衆文化の消費がそれまでの「倭色」

批判一辺倒ではなくなったことはうかがえよう。また、この時期におけるいわゆる「反日感情」と「日本大衆文化批判」の関係性の変化については、日韓大衆文化をめぐる先行研究でも指摘されている。

例えば、キム・ソンミンは、一九九八年以降は日本の大衆文化をめぐる認識や感情をそれまでの「反日感情」として単純化できないという。例えば、二〇〇一年の歴史教科書問題を受けて二〇〇二年八月に行われた「日本放送に対する開放」に関する「放送委員会」の調査において、過半数が歴史問題と放送開放は別個の問題であると答えた。この結果を受けてキムは、「二〇〇〇年代における日本大衆文化消費は、個人の趣向としての好感をあらえて隠すことなく、しかし公的に共有されていた「政治的義務」をも同時に表す形と化していった」（二〇一二年二頁）と指摘している⁽¹⁹⁾。

しかし、なぜ一九九八年以降なのだろうか。九〇年代後半、中国に端を発した韓流ブームをキムは要因の一つとして挙げる。つまり、「文化的侵略」を恐れる文化的弱者の不安から脱却して文化商品をグローバルに流通させ始

めた韓国は、それまでの政治・経済のレベルとは違った相互の「現代性」を、対等な立場で共有するようになった。そのことで、ある種の「親近感」が「発見」されたというのである⁽⁹⁾。ただ、韓流の日本におけるブームが自覚されたのは一般的に二〇〇四年の『冬のソナタ』ブーム以降とされる⁽¹⁰⁾ことを考えると、韓流ブームから一九九八年以降の変化を捉えるのはやや時期が早い。一九九八年の認識転換を論じるのであれば、韓流ブームより、「日本大衆文化開放」をめぐる行われた議論において何が「発見」されたかがより重要ではないだろうか。

キム・イルリムによれば、部分的に日本の大衆文化が開放された一九九八年を前後にして、日本の大衆文化を扱う議論が爆発的增加し、これらを担っていたのは一九六〇～七〇年生まれ世代だったという。この談論のなかで「発見」されたのは彼らが空気のように摂取しながら育った大衆文化、特にアニメや漫画などが日本作品の剽窃だったという事実であった。すでにアイデンティティの一部となっている「日本」を否定することはできず、日本に対する警戒心を解いたのである。それだけでなく、

自分たちが持つ大衆文化に関する博識な情報を紹介しながら、これを媒介として日本を肯定的に見つめ、それまで陰性的に定着し、沈殿していた日本の影響力を積極的に水面上にさらしたと指摘する。また、剽窃問題の浮上によって、「絶対的な悪」侵略国「日本」と「植民地」韓国の倫理的関係がひっくりかえった意識層も形成され、「被害者」韓国と「加害者」日本がやつと同等な舞台に立つたという⁽¹¹⁾。

これは、『朝鮮日報』アーカイブ上で得られた『クレヨンしんちゃん』言説の変遷を考えるうえである程度有効な指摘である。確かに、『クレヨンしんちゃん』関連記事は一九九七年前後で確認でき、一九九八年あたりでは批判されながらも、一九九九年以降においてはある種の懐かしさの文脈で論じられている。ただし、前述したとおり、この分析自体は『クレヨンしんちゃん』言説を代弁するものでも、ましては日本の大衆文化を代弁するものでもない。ただ、今までの論考で比較的に明示できるのは、次のようである。つまり、一九九八年前後に「歴史的文脈」と「大衆文化消費」は別個の問題として語られ

るようになったということである。そして、それは、日本の大衆文化を扱う議論のなかで日本の大衆文化が自国のアイデンティティを構築していることが発見されたことによる可能性がある。その例示として、一九九八年八月二〇日付『京郷新聞』を引用したい。この記事は、植民地解放五三周年を記念して「日本大衆文化開放」に就いての日韓両国大学生特別討論を掲載したものである。梨花女子大学四年生のイ・ケヨンは次のように述べる²³⁾。

『マジンガーZ』『宇宙少年アトム』『日本タイトル』『鉄腕アトム』…引用者』、『未来少年コナン』などが日本漫画であることを少し前になってやっと知りました。これまで我が放送・歌謡が日本のものを剽窃した是非をめぐる議論も多かったですね。私もたまごっちで遊びながら感じたものが多かったです。もう商業文化はすべて入って来ているのだし、規制を口実に良い文化まで度外視しないことを願います。

いずれにしろ、『日本的要素』に溢れた過去を肯定的に

見つめなおす土壌は、大衆文化のレベルにおいては一九九八年以降に生まれたと考えられる。

四 「ふるさと」の喪失

(一) 乱開発による「ふるさと」喪失

冒頭で紹介した日本人による『ピーターラビッド』や『赤毛のアン』の舞台を訪れては「ふるさと」を発見するまなざしは、自国の故郷に対する何らかの負の事件・感情を背景に、大衆文化消費のなかで発見された肯定的感情が「ふるさと」像として現れるプロセスであった。とすれば、一九九八年以降に現れた日本大衆文化とその過去に対する肯定的まなざしが、韓国国内の故郷に対する負の事件や感情を背景に、「ふるさと」のまなざしを日本に向かわせていると考えることもできるのではないか。今まで大衆文化をめぐる「過去の肯定」を見てきたが、ここからは「ふるさと」をめぐる「現在の否定」を見ていく。

大体の国において急速な発展によって無分別な都市開

発と景観破壊が行われるように、韓国においても例外ではなかった。都市の拡大と開発を掲げていくなかで、同じようなマンション、都市景観が一九九〇年代、全国に広がっていった。

一九六〇～七〇年代の政府の首都圏政策は主に人口の抑制及び分散政策だったが、一九八九年ノ・テウ大統領はそれまでの首都圏政策を全面的に修正し、ブندان、イルサンなど、ソウル周辺における五つの新都市建設を含んだ住宅二〇〇万戸建設を計画した²⁰。その背景には、一九八〇年代後半の国民所得の急増と、それにともなう住宅需要への高まりがあった。所得増加につれて家賃も大幅に上昇し、「バンペ！」「部屋から出て行け：引用者」という言葉が流行語になるなど社会問題と化し、当時の政権を脅かしていたのである。一九八九年に開発がスタートするが、一九九一年末にはもう入居できるなど、かなり急いで進めていった。当然、手抜き工事が問題となっていく²¹。

このようなパフォーマンス重視のポピュリズムの開発が招いた結果は悲惨なものだった。例えば、有名な事件

としては三豊百貨店崩壊事故²²などがある。この事件が一九九五年に起こったのは偶然ではなく、こうした見かけだけ「成長」させて支持率を獲得する、という当時の政府による開発ポピュリズムと決して無関係ではないだろう。だが、こうした問題は縮小されるどころか、より深刻になっていった。

一九九三年、キム・ヨンサムが大統領に就任すると、韓国の首都圏政策はもう一度転換期を迎えた。彼は、ノ・テウの新都市開発を総体的失敗とした。そして、新都市は開発しないとし、その代わりに住宅を供給する「妙策」として準農林地制度を実施した。生産性の低い農地と林野を住宅用地として開発するというものだった²³。だが、規制緩和と不足した宅地供給を増やすという名分の下で進められた準農林地制度は、マンション建設ブームを招くとともに、韓国の「ふるさと」に多大な打撃を与えてしまった²⁴。

準農林地政策によりマンションは供給された。しかし、周りの景観を破壊する形で行われた開発は、畑や水田の真ん中にマンションが建つ奇形的な都市を作ってしまった

たのである⁽³²⁾。さらに、景観の良いところには住居がなく、ラブホテルが建つなど、理想的な「ふるさと」とは程遠いものに転落してしまった⁽³³⁾。こうした乱開発の問題による「ふるさと」喪失は韓国人の日本観光に対する感覚にも一定程度確認できる。

(二) 理想としての「ふるさと」日本

乱開発は日本観光にどのような「発見」をもたらしたのだろうか。その一端を確かめるために、韓国人による日本旅行記を分析してみたい⁽³⁴⁾。

まずは、ちょうど乱開発が農村にまで拡大して進行し始めていた一九九五年度の旅行記である。教職に八年勤めている男性で、大阪と東京周辺を観光した⁽³⁵⁾。

御堂筋線の難波で降りて地上に上がった私たちは少しめまいを起こした。まるで華やかなハリウッド映画のなかに吸い込まれる感じだったのだが、各々の商店の看板とネオンサインがすごかった。〔中略…引用者〕

成田国際空港から降りた私たちは空港の規模にしばし開いた口が塞がらない……しかし、我が国にもヨンジョンドに東洋最大の国際空港ができるというが。

銀座、新宿、原宿、そして東京タワーから見下ろした夜景! 〔中略…引用者〕本では日本人たちは電車のなかでみんな懸命に読書をすると思ったが実際はそうでもなかった。また通りすがりに見た彼らの家はなぜそんなにも小さいのか……裕福な国なのかの貧しい個人たちを見るようだった。

この旅行記では、ハリウッドのような華やかさ、当時の韓国にはない大きな空港、大都會の夜景が日本の魅力として捉えられている。一方で、通りすがりに見た小さな日本の家屋は魅力の対象ではなく、その小さくて現代的な華やかさのない雰囲気は「裕福な国のなかの貧しい個人」と表現されるなどマイナスイメージでしかなかった様子が見える。当時はまだ、乱開発による問題よりも「現代性」の獲得がより重要だったのかもしれない。

一方、乱開発が進行し始めてしばらく歳月が流れた二〇〇六年の旅記では「ふるさと」喪失が意識され始める。スウォン大学のユン・チエファン教授は北九州を旅して次のように述べている。⁽³⁹⁾

結構前の話だが、某日刊紙の文化マダンというコラムで某記者が書いたものが脳裏に浮かんだったので紹介しようと思う。その記者は日本の南地方を旅行したが、農村風景が羨ましいほど美しかったと言う。行く所々端麗な二階建て農家とその周囲にある綺麗に整備された畑と道路、村を包む鬱蒼な森と小川が絵のように広がっていたという。まるでヨーロッパのロマンチックな農村風景と似た感覚を覚えたらしい。

それに比べれば我々の農村と都市周辺はどうなのだ。行く所々マンションが建ち、行く所々山の腰を寸断して開発が進んでいる。都市は安っぽい建物に覆われ、新たに立てた住宅は国籍不明だ。そして、都市周辺の山のいたる所にゴミの投棄が絶えない。

我々は果たして我が国土を美しいと思い、我々がしっかり保存して後世に残したいと思う者がいるのだろうか。

同年の二〇〇六年二月二日付『朝鮮日報』にも日本観光に関して興味深い特集が組まれているので、続けて引用したい。⁽⁴⁰⁾

我々が急速な経済成長のなかで失ってしまった過去の姿が日本にはよく保存されている。度々目に入る風景の数々は異国的でありながらも子どもの頃の路地とどこかとなく似ている。異国の都市で懐かしい風景に出会ふときの妙な感覚。東京旅行の醍醐味はそこにあるのではないだろうか。

これらの記述で垣間見られるのは、「本来」あったはずの理想の「ふるさと」は開発の論理によってもはやなく、むしろ日本の農村や都会の風景のなかにあるということと、それらを発見するまなざしの存在である。こうした

まなざしは近年においても継続されており、二〇一五年のある男性の九州旅行記では次のような感想が述べられている。³⁵⁾

博多港の屋上展望台に登って団体写真を撮り、バスで「福岡に…引用者」向かった。本格的な日本旅行が始まったのだ。狭い道路、小さい車、低い車、低い建物、無彩色の街・・・日本で感じた最初の風景を収めた。「中略…引用者」毎日自動車と人混みに溢れる都市に住む私に四、五日間の悠々とした日本の九州への旅は言葉のとおり「癒し」だった。「中略…引用者」日本らしい小さくて可愛い魅力とは何かを如実に感じさせてくれる湯布院の民芸村はまるで韓国のパジュ・ヘイリ村³⁶⁾のようだった。

一九九五年の旅行記においては魅力外だった「小さい」何かは日本における旅の魅力と変わり、「日本的風景」のなかで「癒し」を感じているのである。韓国人にとって日本は、華やかな「現代性」だけを求める場所ではなく

なったことがうかがえる。十分開発の進んだ韓国社会では、むしろ、「現代性」を獲得するなかで失ったものを掘り起こす意味合いが強くなっているとも読み取れる。その時期は必ずしも明確ではないが、日本をノスタルジックな場所として紹介する特集は『朝鮮日報』アーカイブ上、二〇〇六年二月二日付のもの以前は確認できなかったため、大体二〇〇〇年代半ば頃と推測される。

こうして、乱開発を背景に、ただ大きくて華やかな「現代性」に対する嫌悪が一九九〇年代後半にかけて生まれ、それまで日本の意外な一面でしかなかった「小さい」「平凡」「古い」「のどかな」ものに対する魅力的まなざしが二〇〇〇年代半ばあたりに現れるようになったと考えられる。

ここまでの分析と接続して小括すれば、日本人が『ピーターラビッド』や『赤毛のアン』の舞台を「ふるさと」としてまなざすように、韓国人も、日本の大衆文化の消費をめぐる肯定的記憶・感情への転換と国内の「ふるさと」喪失をおして、文化的親近感のある日本にある種の「ふるさと」を見出している、そう論じることでもでき

るかもしれない。しかし、ここで一度考えなければなら
ないのは、なぜ日本にノスタルジックなまなざしが向け
られるのか、という点である。

これまで参考にしてきた大衆文化に関する論考は、映
画やアニメ、漫画を主な事例として扱っている。韓国は
日本を、一方では「遠い隣国」として「自我」の外側に
置きながらも、他方では、日本大衆文化の剽窃問題に代
表されるように、「自我」のなかに巧妙に入り込ませても
いる。日高が指摘しているように、現代における記憶が
大衆消費財のなかに埋め込まれたイメージとしてのみ提
供されるのならば⁹⁰、韓国人にとつての記憶は極めて「日
本的」であると言え、大衆文化の諸要素が日本へのノス
タルジアにつながっていることは疑う余地もないだろう。
その意味で、本論考で取り上げた映画やアニメ、漫画を
主な対象とする大衆文化論は一定程度応用可能だと思わ
れる。

ただし、大衆文化（主に映画、アニメ、漫画）の側面
だけでポストコロナ的ノスタルジアを論じることには
限界がある。例えば、韓国人の多くが『ちびまる子

ちゃん』を見たことがあるとして、そのなかのどういった
要素が日本へのノスタルジアにつながるのか、具体的に
論じることはいささか難題である。文化的親密感の説明
できても、まなざしの方向性は説明しにくい。そこで注
目したのが、「ふるさと」風景の破壊という側面であった。
しかし、田舎はどこも似ている。そのため、都会的なも
のに嫌気が差せば外国のどこかの田舎でノスタルジアを
感じるのにはある意味当たり前かもしれない。

だとすれば、まなざしの日本への方向性をより具体的
に説明できないものだろうか。そのためには、韓国とい
うポストコロナ的空間への理解が必要なのである。
日韓両国の関係を考える際、いわゆる「反日」を避けて
は通れない状況からわかるように、日韓の間にはそれだ
け歴史的特殊事情がある。つまり、なぜ、歴史的に複雑
に絡み合っている日本でノスタルジアを感じるのか、そ
の問いに対する韓国というポストコロナ的空間・特
性からの説明が必要になるのである。

そこで、「ふるさと」風景の破壊に話を一度戻して、あ
えて、韓国が失ってしまった「ふるさと」、あるいは過去

の姿とは何だったのか、と問うことになる。

五 「日本的風景」の観光消費

(一) 「日本的風景」の喪失と「反日」

キム・ヨンサム政権における乱開発の際に消えていったのは理想の「ふるさと」だけではない。韓国は長年、日本帝国の植民地であったことから、その当時に造形された近代的な建物や日本式家屋、鉄道などの産業インフラも数多く残っていた。近代歴史環境と呼べるものの相当数が植民地時代に形成されたものである⁽⁸³⁾。つまり、乱開発で消えていった理想の「ふるさと」のなかには少なからず「日本的風景」も組み込まれていたのである。

こうした韓国人のアイデンティティを形成してきた「日本」を含んだ近代風景は、開発の論理によって消えていくことになる。特にキム・ヨンサムは一九九三年に大統領に就任して以来、民族精気を取り戻すという名分の下、全国的に「日帝残骸清算作業」も国家政策として同時に実行した⁽⁸⁴⁾。

その手始めとして、侵略の象徴であった旧朝鮮総督府は、一九九五年植民地解放五〇周年（光復五〇周年）を迎えて撤去される。当然、国民の共感も得ていたが、強い反対世論にもぶつかった。キム・ヨンサム大統領は反対する側から独りよがりの政策とも批判されていたようである⁽⁸⁵⁾。

旧朝鮮総督府は植民地侵略を象徴するものであるとされるが、そのような建物の撤去に対して反対意見が根強く存在していたことは注目に値する。では、実際、どのように批判されていたのか。一九八七年から『朝鮮日報』の論説顧問を務めたホン・サジュンは、一九九五年八月一日付『朝鮮日報』において、旧朝鮮総督府を壊すことで、過ぎし暗い歴史を抹殺できるなら何でも甘受できるとしながらも次のように反論している⁽⁸⁶⁾。

もつとも旧朝鮮総督府は日帝三六年間の歴史だけがあるわけではない。それは同時に大韓民国建国の産室でもあった。〔中略…引用者〕六・二五動乱〔朝鮮戦争…引用者〕の際、ソウルを取り戻してすぐさ

まごこよりも速く国旗が掲揚されたのも、今、壊そうとしている中央庁の屋上だった。「中略…引用者」その後、半世紀近く、大韓民国の歴史を刻んでいたのもその建物のなかだった。それは大韓民国現代史の歴史的記念物でもあったのだ。そのような建物を政府はとうとう壊すという。「中略…引用者」大韓民国の歴史は、一九四八年から始まったものだ。一九九五年から始まったわけではない。その半世紀にかけて大韓民国現代史の唯一無二の記念物を、後のことも考えずに壊そうとしている。

旧朝鮮総督府は、植民地支配の歴史である以前に、韓国の政治が行われ、朝鮮戦争の後の国旗掲揚など、自国の現代史でもあるため、むやみに壊すべきではないという認識である。植民地支配の象徴に向けられたこのような意見は、一体何を意味するのだろうか。旧朝鮮総督府撤去騒動から五年後の二〇〇〇年七月二〇日付『朝鮮日報』をもう一件引用したい。この記事は、全羅北道北西部に位置する港町グンサンに多く残る敵産家屋（旧日本

帝国によって建てられた家屋の呼称）を撮った写真展がデジョンとソウルで相次いで開かれることを紹介しながら次のように報道している。¹²⁾

写真のなかに登場する日本建築物のなかで、保存状態のいい「クマモト別荘」を見れば、まるで外国にきているようだ。「中略…引用者」現在ここには「グンサン…引用者」一〇〇軒あまりの敵産家屋が残っている。チョン・チェホン氏は「対策もなしに一つ一つ壊されていく日本住宅を記録し始めた」と述べながら「子どもみたいな敗北意識を捨て近代建築物に対する愛情を蘇らせるとき」と述べた。

この記事で興味深いのは、植民地支配の負の歴史を意識しつつも、「敵産家屋」近代建築物」を守られるべきものとし、開発のなかで消えていく姿を惜しみ、愛情を注ぐべき対象として捉えているところである。つまり、旧日本帝国によって築かれた近代風景が消えることに対してただ喜ぶわけにもいかない複雑な感情があり、その「昔

の姿」を実は惜しむまなざしが韓国社会に存在していたのである。要するに、キム・ヨンサム政権による日帝残骸生産は、紛れもない自国の歴史と思いい出を消していたのである。

こうした状況から、韓国にとって日本は単なる「他者」ではなく、空間のレベルにおいても、日本が残っていた植民地遺産は複雑なアイデンティティを形成させている様子が見て取れる。韓国社会が失った過去の姿、あるいは「ふるさと」は、「日本的風景」でもあるという複雑な事情が韓国社会にはあるのだ。そして、そのような「日本的風景」は韓国の近代風景を深いレベルで規定していたのである。

一九九〇年代半ばに本格化した開発の論理と、「日帝残骸清算」という「反日」の論理は、こうした「日本的風景」でもある近代風景を消していった。だが、皮肉なことに、日帝残骸を開発の論理と「反日」をとおして消していったことによって、かえって「日本的風景」に対する価値を上昇させてしまったように見える。また、開発の論理も日本によって与えられた「近代性」の否定

の上になり立つと考えれば、それらを「反日」をとおした「脱植民地化」過程と捉えることもできるだろう。そうすると、興味深い逆説的狀況が浮かんできく。すなわち、「反日」をとおした「脱植民地化」は、「日本的風景」に対する喪失感と価値上昇を招いてしまい、その姿を惜しむように仕向けてしまったのではないか。そして、それは、意図せずして理想の「ふるさと」像に「日本的風景」を組み入れてしまったのではないだろうか。

その可能性を検討するために、二〇〇〇年代の韓国における近代風景の観光地化を見ていきたい。先述のとおり、韓国における近代風景は、その多くが「日本的風景」でもある。その典型として、近年「日本的な風景」によって観光地化するグンサンという都市を取り上げたい。⁽⁴³⁾

(二) 韓国における近代文化遺産の観光化

一九九七年に勃発したIMF通貨危機などによって都市（再）開発ブームは落ち着いていく。また、二〇〇二年には登録文化財制度の始まりによって近代風景を守る法的措置が初めて用意された。こうした国家的危機と法

的措置によって、再開発の核心的対象であった近代風景の多く残る旧都心は、開発の論理から逃れた⁽⁴⁴⁾。

一方で旧都心は、二〇〇〇年代に突入すると、一九九〇年代半ばからの全国的な「日帝残骸清算」が多くの近代風景を喪失させたこともあって、やがて観光資源として浮上する。なかでも全羅北道北西部に位置するグンサンは比較的早くから観光資源として注目された。

二〇〇二年、グンサンでは、文化財登録法及び中国との国交正常化の雰囲気の中で「グンサン・チャイナタウン計画」が打ち出された⁽⁴⁵⁾。「チャイナタウン」を冠してはいるが、旧都心の文化、観光、歴史資源の現状を把握、老後建築物の維持管理及び新たな空間創出をつうじて文化観光環境の形成を試みたものだった⁽⁴⁶⁾。グンサンの歴史資源の多くは「日本的風景」でもある近代風景であることを考えると、日帝残骸を観光資源にするための模索という側面も持ち合わせている。だが、この計画は事業生産性の問題から中断となる⁽⁴⁷⁾。

二〇〇三年には、一九九五年に一度は撤去されかけた国内唯一の日本式寺である東国寺が文化財に登録され、

イ・ヨンチュン家屋（旧クマモト別荘）も全羅北道有形文化財に登録された。それまで撤去一辺倒だった認識に転換が訪れたのである⁽⁴⁸⁾。

撤去から保存への転換期を迎えた翌年である二〇〇四年には、グンサン市の近代文化遺産に対する保存方向と方法が模索され⁽⁴⁹⁾、「グンサン・チャイナタウン計画」を包括しながら二〇〇五年には「グンサン近代歴史文化景観整備基本計画」が立てられた。旧都心に関する近代歴史文化景観地区を指定、保存及び活用する方法を探った保存指向的な都市景観計画が成立したのである。これを皮切りに、二〇〇七年「グンサン原都心活性化条例」、二〇〇八年「グンサン市都市景観基本計画」、二〇〇九年「グンサン近代歴史文化ベルト化事業マスタープラン」と続いた⁽⁵⁰⁾。グンサンの観光地化は、制度的には二〇〇〇年代初期に動きがあり、半ばあたりから本格化したと見える。

グンサンは、植民地時代の日本式家屋などを壊さず、少し直して再利用している家が多い⁽⁵¹⁾。そのため、一九三〇～八〇年代までの風景を必要とする映画をセットな

しで撮れ、数多くの映画作品の舞台となった。そのうち人気を博した映画のロケ地や固有の風景を保った地として徐々に有名になり、二〇〇八年には不動産価格が三〇%上昇するなど、観光地化が制度以外の面でも進められていった⁽⁵³⁾。

制度的動きと合わせて考えると、グンサンの観光地化が本格的になったのは、大体二〇〇〇年代半ばあたりと推測できる。しかし、こういった観光地化は「反日」とおした「日帝残骸清算」とどのような関係があるのだろうか。

J・アーリとJ・ラースンによれば、観光のまなざしの対象となるのは表立っていないなくても何らかの意味で普段とかけ離れているものであるという。その際、非日常的なかどうかは視覚的に区別されるとした上で、その区別の感覚が持続していくには多様な道筋があると述べる。その一つに、昔ならありふれたものが、現代において普通ではない姿として発見されることを挙げ、かつての生活が「リアル」なセッティングで展示される形で現れると指摘している⁽⁵⁴⁾。

つまり、グンサンは、「日帝残骸清算」で全国的に「日本的風景」でもある近代風景が視覚的に消えていったからこそ、一九三〇～八〇年代の韓国がある意味「展示」された場所として観光地になり得たと考えることができる。このような事例はグンサンだけではなく、例えば、全羅南道モクポ市も近代風景を活かした観光地づくりを行っており、「思い出旅行」というコンセプトを打ち出している⁽⁵⁵⁾。

このように、近代風景の喪失感と価値上昇は二〇〇〇年代以降に観光地化という形で現れるようになったのである。「反日」情緒にもとづく「日帝残骸清算」は、かつて「日本的風景」でもある近代風景に価値を見い出させた。ただ、そうした状況がノスタルジックなまなざしを意味しているものかどうかは検討の余地がある。例えば、グンサンは、「時間旅行」や「癒し」の観光地を標榜する(写真①)一方、三・一抗日運動関連の展示も多く行っている(写真②)。

写真①…東国寺前の観光インフォメーション。「一九三〇年代近代グンサン時間旅行」、「グンサンがあなたの記憶を癒してあげます」と書いてある。



写真②…「グンサン抗争館」に展示されたオブジェ。抗日運動家が拷問される様子。



単なる「反日」情緒の延長線上としてなのか、近代風景の喪失感を背景にした失われたものへのノスタルジックなまなごしなのか。グンサンにおける観光の体験を、世界的な旅行口コミサイト「トリップアドバイザー」の分析をとおして検討したい。

(三) ロマンチックな近代風景

グンサン市所在の観光地一七件中、「日本的」な近代風景でランクインしているものは、ヒロツ家屋(二位)、東国寺(三位)、グンサン税関本館(四位)で、ロコミ数は二〇一七年一月一四日時点においてそれぞれ六九件、三九件、二二件だった。全ロコミのなかで、植民地支配の歴史に触れているロコミが何件あるのか、どのような内容なのか、反対に植民地時代に触れていないロコミはどう書かれているのかを見ていきたい。

ヒロツ家屋、東国寺、グンサン税関本館におけるすべてのロコミ数は一二九件で、うち韓国人による投稿は一〇四件だった。植民地支配の歴史に触れているものは、感傷的なものと淡々としているものを合わせて三四件で、それほど多くはない。大多数のロコミは景観の綺麗さ、日本観光気分になれるなどの内容だった。

個別に見ていくと、ヒロツ家屋の場合、植民地支配の歴史に触れているものは一七件、そうでないものが四二件、東国寺は九件と二二件、グンサン税関本館は九件と六件である。ヒロツ家屋の語りは、植民地侵略によって

日本人が莫大な富を築いた様子が語られる一方で、庭園や家屋の綺麗さ、静かな雰囲気などが魅力としてあげられている。東国寺の場合は、少女の像が敷地内にあるため、それとの関連において植民地支配の記憶が語られるものもある一方で、日本式寺という珍しい様式や竹林の美しい雰囲気の魅力となっている。グンサン税関本館は富を略奪されていた歴史が意識される一方で、建築的美しさや数少ない韓国の近代を感じられる場所として語られる。

観光名所ごとの違いは見られるが、植民地支配の歴史に触れているものは少ない上、一般的な想像とは違ってその歴史に触れる際も、感情的になっているものはそれほど多くない。感情的になって怒りや悲しさを覚えるロコミは、ヒロツ家屋八件、東国寺五件、グンサン税関本館四件ほどである。では、植民地支配の記憶に触れているものと、そうでないロコミは具体的にどのような内容なのか。特に印象深いものをそれぞれ二件ずつあげたい。まずは、後者から。「近代歴史を感じられるところ」(二〇一五年一〇月一六日レビュー)というタイトルのものと

「外から見るだけでも満足・」(二〇一五年九月九日レビュー)を順にあげる。両方ともグンサン税関本館につけられたロコミである。

昔の歴史を感じられる場所です。実際、近代歴史を感じられる機会はそれほど多くないですが、昔の建物がそのまま残っているので一風変わった感じでした。悠々と歩きながら歴史の名残を感じられていいところでした。

近代式建築物というが、何か、うわあ・・・って言わせる建物でした。建物外観から感じられるパワーがすごいです。

次に植民地支配の歴史に触れているものを、「息抜きに行った場所」(二〇一五年九月九日レビュー)と「いいですね」(二〇一五年一月八日レビュー)の順にあげる。前者はヒロッタ家屋、後者は東国寺につけられたロコミである。

「中略…引用者」庭園も綺麗で初めて会った方々が写真も撮ってくれたり・・・この場所は歴史的にそれほどいいところではなかったとしても、私の旅行においては気持ちいいところだった。

我が国で唯一の日本式寺で近代の痛みを見られる場所です。近所にも日本式家屋があつて一緒に見るといいですね。その歴史を知らないで行ったらただ綺麗な寺だとばかり考えるかもしれませんね。日本式寺なので雰囲気独特でお寺そのものの美しさもあります。そして過去の過ちを反省する碑石？もあつて、読んでみて複雑な気持ちになりました。

植民地支配の歴史に触れていないロコミの内容からは、もはや珍しくなってしまった近代風景を悠々と楽しんで何となく感動するというふうに、ロマンチックに消費している様子がうかがえる。一方、植民地支配の歴史に触れているロコミでは、前者ほど露骨ではないにしろ、ほぼ同じような感じ方が歴史と複雑に絡み合っている様子

が見て取れる。

ここで興味深いのは、植民地支配の歴史を観光において意識している口コミでも、少し複雑な気持ちにはなるがなかなかいい場所であるという認識が見て取れる点である。

以上の分析からグンサンにおける観光は、単なる「反日」情緒の延長線としてではなく、近代風景の喪失感を背景にしたノスタルジアのまなざしにより近い文脈で消費されている様子が垣間見える。

では、グンサン観光におけるノスタルジアのまなざしは日本観光におけるそれとどういう関係があるのだろうか。グンサンが観光地化したのは二〇〇〇年代半ばあたりで、日本を懐かしくまなざすようになったのも大体その時期であると考えられる。つまり、グンサンにおいて発見された「日本的風景」へのノスタルジアのまなざしが日本観光にも投影されるようになった可能性があるのである。その例示として、ある韓国人のグンサン観光についてのブログ記事を引用したい⁽⁵⁾。

グンサンに行った際に、路地裏の家の玄関の写真を撮っていたら本当に多様な玄関の門が存在していることを知った。マンシヨンに二〇年以上も住んでいたから、こんな玄関を持った家があるということをしばらく忘れていた。懐かしいあの頃。「中略…引用者」私、昔はこんな家に住んでいたんだ。その頃が懐かしい。ところで、写真を眺めていれば、グンサンと日本は本当に似ている。東京を旅していたとき、路地でふと、あ、ここまるでグンサンみたいという言葉を何度も発していた。

六 結論「反日」とノスタルジア観光

こうして、一九九〇年代の乱開発と「日帝残骸清算」とおして消えていった「日本的近代風景」は、その喪失感と価値上昇をおして懐かしさの観光地となり、日本においても、そのまなざしが投影されるようになったと考えられる。では、このようなまなざしの形成と方向性において最も重要な役割を果たしたものは何か。本論

考ではそれを、最もノスタルジアと矛盾しているように見える「反日」に求める。韓国における「日本的近代的風景」を価値ある、愛情を注ぐべき対象として掘り起こしたのは、「反日」という理念が実体化した「日帝残骸清算」が果たした役割が大きいからである。こうしたことは、韓国における日本の大衆文化の消費をめぐる議論においても指摘できる。

チャン・ヨンゴルによれば、韓国では植民地解放後、新国家を建設するためには、植民地支配から受け継いだ旧日本帝国の文化的影響力を排除することが必要との認識に立ち、日本的要素が強かった近代・大衆文化をアイデンティティ構築過程から意図的に除いたという⁶⁹。となれば、法的根拠の乏しい「日本大衆文化禁止」が長年継続することができた理由は、こうした「反日」の建前と決して無関係ではないだろう。また、キム・ソンミンが指摘するように、「日本大衆文化禁止」は、「模倣」や「剽窃」、「海賊版」のような産業的・文化的慣行を拡大再生産した側面がある⁷⁰。商業的理由から、日本の大衆文化は都合のいいコンテンツであったが、「反日」という

建前がある以上、韓国のものやアメリカのものとしてカモフラージュする必要があったのである。

彼らの指摘を参考にすると、ここにもまた逆説的文化状況が見えてくる。つまり、「反日」という建前があるがゆえに、「日本大衆文化禁止」が行われ、巧妙に韓国のものであって剽窃され続けたのであり、日本のものとしてではなく、韓国のものとして韓国人のアイデンティティを構築していったのである。「反日」は、日本という他者を「韓国の一部」として取り込ませるといふ、最も「反日」に「反」した文化状況を用意したと考えることができる。

こうした「反日」が用意した土壌のうえで、一九九八年を前後に、剽窃の問題が本格的に明らかになる過程において「日本的自我」が発見され、日本の大衆文化の消費を批判することが難しくなっていた、という図式を指摘することができよう。

二〇〇〇年代半ばあたりから見られる日本へのノスタルジアは、このように「反日」をとおしてかえって日本を内在化していくというポストコロナル的状况によってもたらされたものではないか。つまり、「反日」は日本

の大衆文化の消費による「過去の肯定」、乱開発と「日帝残骸清算」による「現在の否定」というF・デーヴィスが指摘したノスタルジア成立の社会的条件を整え、そのまなざしを日本へ向かわせている、と考えられるのである。ここまでの話を踏まえて、最後に、二〇〇六年二月二日付『朝鮮日報』の日本観光に関する特集の続きをもう一度引用したい⁶⁸⁾。

まるで昔からそこにあつたように異質感がなく軒を連ねているお店は目を楽しませる。「中略引用者」古き東京の趣を感じる最も手取り早い方法の一つは都電荒川線に乗ることだ。「中略引用者」都電の内部を見るのも一風変わった体験でいい。綺麗だがシンプルで復古的な構造の車両内に貼つてある広告もまた郷愁を呼び起こす古き雰囲気をよく活かしている。

このように韓国人は、今まで述べてきた「歴史と文化消費の分離」「乱開発と日帝残骸清算」「近代風景の観光

地化」を背景に「異質感」にあふれている韓国ではなく、「異質感のない」異国で、しかも、「反日」の対象である日本で「ふるさと」を懐かしんでいるのではないか。そこは「古き良き韓国」であると同時に「古き良き日本」でもあり、「古き良き日本」は「古き良き韓国」でもある。何重にもねじれたこのようなノスタルジアは、「反日」という排除の論理によつてかえつて取り込まれた「日本」という他者ならぬ「他者」によつて形成されたと考えられ、ポストコロニアル的ノスタルジアの複雑さを物語っている。本論考は、不足なりにも韓国人による日本へのノスタルジアを、こうしたポストコロニアル的状况、特に「反日」をとおして考察を試みたものである。

① 『도쿄 100배 즐기기』(주)알에이치코리아, 二〇一五年, 六五頁。

② 『JUSE P TOKYO』에디터, 二〇一五年, 二七八頁。新宿ゴールデン街に関する紹介文は以下のようである。「狭い路地に小さいバーが軒を連ねていて過去のチョヨンロ・ビマツコルを連想させる。中略 黄金期は過ぎ、衰えた雰囲気だが、昔の姿をそのまま大事に保っており、過去を回想しながら訪れるものも少なくない」。

③ 『RAWIE』(주)F행신문화, 二〇一四年四月号。

④ 『デジタル大辞泉』小学館 <https://kotobank.jp/word/ノスタルジア> 96892、最終閲覧二〇一七年一月二四日。

- (5) 見田宗介ほか編『現代社会学事典』弘文堂、二〇〇二年、九五頁。
 (6) F・デーヴィス著／間場寿一ほか訳『ノスタルジアの社会学』世界思想社、一九九〇年、二二七頁。
 (7) 日高勝著『昭和ノスタルジアとは何か：記憶とラディカル・デモクラシーのメデイア学』世界思想社、二〇一四年、五〇六頁。
 (8) Michael H. Rea, 2000, A furusato away from home, *Annals of Tourism Research*, 27(3), 638-660.
 (9) 『朝鮮日報』一九九八年七月一八日一〇面、一九九八年に行われたワールドカップ日韓戦において韓国側応援団が『マジンガーZ』の主題歌を応援歌として歌ったことがある。日本応援団側もこれには驚いたようである。これを受けて同記事は、そうしたことが起きた理由を「この主題歌が日本の歌に歌詞だけ韓国語に変えたものだから」とし、「アニメの主題歌だけではなく、童謡も日本のものを韓国のもので勘違いして歌っているケースが多い」と指摘している。この一件は、日本の大衆文化が単に外国の文化として切り捨てられない状況を物語っている。
 (10) 『京郷新聞』一九八一年八月一七日三画、同記事は、当時の大衆文化状況を以下のように報道している。「四〇代後半」「九八一年時点」引用者）のなかには日本歌謡に対する魅力を忘れない人が多く、そのような人のために日本歌謡の複製テープや粗末な複製音盤まで裏市場で取引されている。解放後の韓国社会における大衆文化は植民地期に形成された大衆文化状況と切っても切れない関係にあった様子がうかがえる。
 (11) 『東亜日報』一九八六年一〇月五日一面。
 (12) キム・ソンミン著『戦後韓国と日本文化：「倭色」禁止から「韓流」まで』岩波現代全書、二〇一四年、一〇〇頁。
 (13) 同前、同頁、「日本大衆文化禁止」の法的根拠の乏しさについては、同著の第二章「倭色」の意味と「禁止」の形成」を参照されたい。
 (14) 『朝鮮日報』一九九七年七月一七日二面、同記事では、それまで親しんで来た漫画の原籍が日本であるとし、以下のように報道している。「宇宙少年アトム」「日本タイトル『鉄腕アトム』」引用者、「ルパン三世」「挑戦者

- ハリケイン」「日本タイトル『あしたのジョー』」引用者、「マジンガーZ」「キャンディ」「日本タイトル『キャンディ・キャンディ』」引用者、「銀河鉄道九九九」「未来少年コナン」「ドラゴンボール」「らんま」「チャングは止められない」「日本タイトル『クレヨンしんちゃん』」引用者、「スラムダンク」「ゼーラームーン」誰しも一度は見たことあるこの漫画たちの原籍は日本である。もちろん、それ以前からもこうした指摘は行われたが、一九九八年の「日本大衆文化開放」を前後にして日本大衆文化に議論が集中した時期に行われたことから、その影響力の大きさは以前とは比較できないだろう。
 (15) 『朝鮮日報』一九九八年七月一八日一四画。
 (16) 『朝鮮日報』一九九九年八月二三四画。
 (17) 『朝鮮日報』二〇〇〇年三月七日三八画。具体的な報道内容は以下のようである。二〇代漫画家五人で結成されたアマチュアロックバンドが妙なアルバムを出した。「中略」引用者、イバルシヨ・ボルノシ「このロックバンドの名前」引用者、音楽はチンドン屋のわいせつげすばった話や、悪趣味なトイレの落書きを連想させる。それでも、淫乱だが陰惨ではなく、低俗だが汚くない。すべての収録曲にユーモア溢れる演劇的要素が入り混ざっており、妙な感じを強調した。まるで「チャングは止められない」「日本タイトル『クレヨンしんちゃん』」引用者、で主人公が繰り広げるボルノアブニングのように感じられる。「段々」引用者、幼稚な三流風だが、一方では愛着が湧き、笑えるこの漫画が、また、このバンドが「中略」引用者、安っぽいコメントを乱発するたびに、音楽の真心想的成就も投げ出した主流歌謡に対する揶揄を聞くようだ。
 (18) 『朝鮮日報』二〇〇七年三月二八日二面。具体的な報道内容は以下のようである。「三・一祝日である一日、アニメーション専門チャンネルトゥニバスとチャンプはそれぞれ「ドラえもんデー」「チャング」「クレヨンしんちゃん」のこと」引用者、デーに命名した。この日の午前七時からトゥニバスでは「チャングは止められない」「日本タイトル『クレヨンしんちゃん』」引用者、をこの日の夜二時まで放送し、チャンプは「ドラえもん」一期を

この日の午前六時から次の日の午前二時まで二〇時間連続編成で対抗した。

(19) キム・ソンミン前傾 二〇一〇二頁。

(20) 同前 二〇七二〇八頁。

(21) 同前、同頁。韓流ブームが日本に対する認識を変化させたことに異論はないが、日本に対する認識の変化を韓流ブームだけに還元することはできない。もちろん、キム・ソンミンも、日本との政治・経済・文化的状況の変化の上でその変遷を考察している。だが、一九九八年を前後にどういった自我が発見されたかには力点がない。本稿で着目したいのは、韓国人が日本文化を自国のものとして自我に取り入れたときに何が起きるのか、その文化消費の歴史がもたらした帰結の一端である。

(22) 김일남 「1990년대 한국 대중문화담론 속의 일남」, 『공정적 일남』, 『미지의 형상』 구조 『日本研究』『Japanese studies』二〇一四年第三七集、二二五二五〇頁。

(23) 『京郷新聞』一九九八年八月二〇日一八面。

(24) 『東亜日報』二〇〇三年一月四日A五面。

(25) 『東亜日報』二〇〇六年一月二二日A三〇面。

(26) 一九九五年六月一九日、ソウル・ソチョ区ソチョ洞にあった三豊百貨店が崩壊した事故。手抜き設計・工事・維持管理などが原因で発生したとされ、五〇〇人以上の死者が出た。朝鮮戦争以来最も大きな人的被害の一つとされる。

(27) 前掲 『東亜日報』二〇〇六年一月二二日A三〇面。

(28) 前掲 『東亜日報』二〇〇三年一月四日A五面。

(29) 同前。

(30) 前掲 『東亜日報』二〇〇六年一月二二日A三〇面。

(31) 韓国人の日本観光に対する感覚がどのように変わったかを明らかにするために必要なのは観光のトレンドを紹介した文献なり、記事を参考にすることだろう。韓国に日本における『るるる』的な傾向を読み取りやすいものはないかと探してみたが、見つけることはできなかった。そこで、分析に使う記事は韓国の国立中央図書館が提供している『学術誌統合検索システム』で『일

본 여행』で検索を行ってヒットしたものである。延べ五三件がヒットし、そのなかで確認できた日本旅行記は八件だった。

(32) 신명희 『일본 여행기도 코타워에서 본 일본의 밤 풍경』『초등우리교육』一九九五年七月号。

(33) 윤재환 『일본 여행에서 느낀 점』『한국건축시공학회』二〇〇六年六卷一号。

(34) 『朝鮮日報』二〇〇六年二月二日D二面。

(35) 김승섭 『태마기획』, 『바다의 날』, 『바다가 힘이다』, 『제8차 선상세미나』, 『바다 일간의 큐슈지역 여행기』 시간마저 느끼게 흐르는, 힐링: 큐슈 지방 여행의 일지 『5월 한국해사문제연구』 주최 『5월명참여 고려해리』, 『카멜리아』, 호타고 부산 하카다항 일본 역사 문화 탐방 『해안한글』二〇一五年六号。

(36) 韓国国内最大の芸術村。広さは約四九万平方メートルで、京畿道パジュ市に位置している。一九九八年の創立総会を皮切りに、美術家、音楽家、作家、建築家など三八〇人以上の芸術・文化人たちが会員として参加した。村はいったんここに芸術作品が置いてあり、村全体が美術館のような雰囲気を出している。そのなかには懐かしい「あの頃」を連想させる演出が施されているものもある。

(37) 日高前掲 五五頁。

(38) 강동진 『이순자』도시 재생을 위한 근대 역사 환경 활용 방법 본섭부산광주군 산을 사례로 『국토연구원』二〇〇八年、五六頁。

(39) 同前、四一、一六八頁。

(40) 『KBS NEWS』二〇一五年二月二日, <http://news.kbs.co.kr/news/view.do?nc=11831&cat=1>, 最終閲覧日二〇一七年一月一四日。

(41) 『朝鮮日報』一九九五年八月一日七面。

(42) 『朝鮮日報』二〇〇〇年七月二〇日三五面。

(43) グンサンは、植民地時代、金融と土木施設が発達した経済の中心地であり、栄えた港町だった。一九二〇年には朝鮮人とはほぼ同じ数である六〇〇〇〇人ほどの日本人が居住していた。今もなお多くの「日本的要素」の濃い近代風景

を残しており、それらは特にグンサン内港および旧都心を中心とした二、三街近隣地域に密集しており、韓国において代表的な近代財産密集地域となっている。

(44) 장동준/이순자前掲 五九頁。

(45) 同前 一六八頁。

(46) 송석기『제3장 근대문화도시조성사업과관산근대도시경관변화의 기록』『관산의 근대 풍경 : 역사와 문화』도서출판 선인, 二〇一五年, 八二頁。

(47) 장동준/이순자前掲 一六八頁。

(48) 同前 一六九頁。

(49) 同前 同頁。

(50) 송석기前掲 八四八五頁。

(51) 『朝鮮日報』二〇〇九年五月一四日D 三面。

(52) 『朝鮮日報』二〇一四年一月二日A 三面。

(53) J・アーリ/J・ラーソン著(加太宏邦訳『観光のまなざし』増補改訂版 法政大学出版局 二〇一四年、二二二四頁。

(54) 『光州日報』二〇〇九年六月一〇日二面。具体的な報道内容が以下のようである。「最近, 歩きブームがウエルビンの新たなトレンドとして急浮上したのを受けてモクポ市が文化・歴史資源を特徴あるストーリーで脚色し、国内外観光客たちが感じて学んで体験できる観光商品化を推進しており、その行方が注目を集めている。『段々えて・引用者』市観光企画課が構想中であるストーリーは「二〇〇年前への時間旅行」と「思い出旅行・痕跡探し」などの二本立てだ。『段々えて・引用者』一〇〇年前への時間旅行は「もし一〇〇年前に送った手紙が紆余曲折の末に郵便局に保管されて今日のあなたに届くとしたら」というテーマのもとで文化観光解説者の味のある解説とともに始まる。『中略・引用者』ここはまるで一九三〇年代の映画のセットのように近代文化遺産が最もよく保存されていて、港町の一味違う魅力を感じられるのが特徴だ。『中略・引用者』モクポの代表的遊郭街である桜町、当時の百貨店と商店が繁盛した本町、経済と産業中心地である中町の跡がいたるところに

残っている。『中略・引用者』パク・ソヨン観光企画課長は「解説者の味のある解説とともにこのコースを周るのに六時間ほど所要される」とし、「近隣地域と連携してモクポに滞在もできるような商品として推進している」と語った。『段々えて・引用者』パク課長はまた「モクポ市内は歴史・建築・古美術学関連学生、日本人観光客など多様な層のための街博物館であり、打ってつけの商品」と述べた。

(55) 「『관산여행』의 수한 그 집안」, <http://blog.naver.com/maysix71/6017473720>, 最終閲覧日 二〇一七年一月一四日。

(56) 장동준『일단만 대충문화의 수용을 통해서 본 '반인'의 역설적 의미에 관한 고찰』『동북아연구』二〇〇〇年五号 二七九二八頁。

(57) 김・송민진前掲 一六五頁。

(58) 前掲 『朝鮮日報』二〇〇六年二月二日D 三面。